

差別解消は「3つ」のことから

市人権推進課（教育庁舎1階）
 ☎32・2122 / FAX 33・3525
 Mail:jinkensuishin@city.komatsu-shima.tokushima.jp

差別解消のヒントになる見方、考え方として公益社団法人全国人権教育研究協議会発行の月刊「同和教育 であい」（2014年8月No.628号）に、関西外国語大学短期大学部教授・明石一朗さんの話が掲載されていましたのでご紹介します。

差別解消の展望や見通しは「3つ」のことから

※1つは、素敵な出会いと豊かなふれあいをたくさんすることである。

USJ（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）に子どもが「いききたい！」と言った時、父母が「あ

んなん恐ろしいもん、よ
う作ったなあ、お母さん」

「ほんまやな、お父さん。みんな騙されて行っているけど、行ったら最後、二度と帰ってこられへんのやっつて」。それを聞いた子どもは「USJって怖いところなんや・・・」と信じてしまう。ところが、

学校で友だちが「USJ楽しかったー面白かった！」と啓発し、「USJは、楽しいところなんや」と、子どもは気づく。出会いとふれあいを豊かにすると、本筋のことが見えてくる。同和問題も同じ事が言える。

※2つは、人権問題を自身に引き寄せて考え行動することである。

差別は「ひと事、よそ事、他人事」だと遠い。病気になるってはじめ健康の尊さが分かるように、人は我が事となつてはじめて身近な問題となる。そのためには、各人の人権課題を見つめ重ね合わせることが重要だ。

※3つは、正しく学ぶことである。

花がきれいと思うだけの子どもは花を摘み取る。しかし、種からふた葉や本葉が出て、つるが伸び、やがて花を咲かせ実をつけるといった植物の成長を学んだ子どもは花を育てるようになる。わかるというところが人を賢くする。

人権問題も正しいことを学ばなければ、間違った考え方や風評に騙される。

これまで積み上げられてきた同和教育をはじめとする人権教育の研究実践は、差別の現実には深く学びながら、子どもの未来を切り拓き保障する営みであった。そのことを今、改めて確認しなければならぬ。

小松島市人権標語
 入選作品(その2)
 変わりた

見ているだけの
 自分から

市民文芸 花みずき歌壇(306) 松並敦子・選

亡き息子が初月給で買いくれし紺の蝦蟇口いまも健在

横須町 福島 夢栄

《評》蝦蟇口は口金をひねり開閉する財布で、ファスナーが普及するまで財布と言えはガマ口であり、私もガマグチを使っていた思い出がある。「紺の蝦蟇口」は事故で亡くなられたと聞く息子さんが初月給で買ってくれた形見の品。「いまも健在」の擬人語に深い思いが込められており、色も褪せず、口金もピカピカ、いかに大切に息子と思つて扱ってきたかを表現する語として絶妙である。

わが家には甘え上手な猫がいて負けず劣らぬ孫娘がいる

田浦町 太田カツミ

ご来光の今もなつかし過ぎし日の富士山頂に感動の刻

立江町 濱 耕一

紙漉きの中村さんちの工房はマイナスイオンや酸素が濃密

横須町 山崎 泰子

陽に映ゆる野菜並べど硬貨持たず無人売場に未練残して

江田町 深田 伴子

紺色の着物の肩に銀杏降り黄蝶にも見ゆ瑞巖寺の庭

赤石町 田原トシ子

日々気にす八個寄り添い揺らぐ枝みかん落ちるな

取り入れまでは

神田瀬町 大西カヲル

今宵また好きな言葉を日記帳に記し終りて湯船に浸る

横須町 柿本美知子

夕来れば隣家のワンちゃん放たれて散歩のわれに寄り来て尾を振る

横須町 三宅 敏恵

辛うじて生きて来たりぬ八割は麻痺したる身の重さとともに

ひのみね総合療育センター 関 政明